国立国語研究所学術情報リポジトリ

文法地図の課題と将来：サ変動詞「する」の東北方言における分布と解釈をめぐって

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2021-06-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 大西, 拓一郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003298

文法地図の課題と将来
－サ変動詞「する」の東北方言における分布と解釈をめぐって－

言語変化研究部第１研究室　大西拓一郎

要旨：

文法は，体系的性質を強く持つ。したがって，ひとつひとつのことがらの背景にはそれを支える構造の存在を考えることが必要である。『方言文法全国地図』を見るにあたってもこの観点は，不可欠で，１枚の地図から読み取ることができる情報は少なくないものの，それだけでは多くの場合，ある程度のレベルでの推測をまじえた判断しか下せないことが多い。関連する項目の持つ情報を総合的に整理し，その中から分析することが求められる。その一方で，総合的観点から分析しようとしても，実際上，調査項目に盛り込まれていない限りは，必要な情報が得られないという，はがゆい事実がまちかまえている。新たな情報の収集が求められるわけである。このようなことがらについてサ変動詞「する」の東北地方における分布とその解釈をめぐって考察する。

キーワード：方言文法全国地図　東北方言　サ変動詞　サ行五段化　なびき

１．はじめに

活用は，限られた枠組みの中に多数の語彙がおさまるいう点で，体系的な性格を強く帯びている。したがって，部分に起った変化は，小さなことのように見えながら，全体に影響を及ぼすものであることが少なくない。見方を変えれば，ひとつの事象をもって，全体を述べることは危険であることにもつながる。分析するにあたっては，関連する枠組みに考慮しながら進めることが求められる。以下では，東北方言におけるサ変動詞「する」のサ行五段化といわれる現象について検討する。

２．総合図の必要性

東北方言の「する」は，サネー(否定)・ス(終止)のような形を見せることから，サ行五段化していると言われてきた(井上(1979)，金田一(1977)p.140，此島(1961)p.143，など)。サ行五段活用動詞(出サネー・出ス)との類似化という方向の解釈である。この点について，『方言文法全国地図』(以下，ＧＡＪ)をもとに検討してみる。

図１には，「しない」の東北地方における分布を示した。上記のとおり，サネーのような五段活用の未然形相当(「出さない」「押さない」など)の形が見られる。ただし，この１枚をもってサ行五段化の地域を断定するのは危険である。

図２「する」(終止形)を見てみよう。図１の「しない」サネーの地域と「する」スの地域は一致しないことがわかる。すなわち，「しない」サネーの方が，岩手県中部に秋田県側からはりだしていて，秋田県の中でも「しない」サネーの方が密度が濃い。また，秋田県内には「する」スーのように長音を持つ形が見られることがわかる。このように，図１でサネーが見られるからといって，その地点でサ行五段化が完成しているとは言えないことがわかる。

さらに仮定形や命令形を見てみよう。サ行五段

図１「しない」(第２集84図より)

図２「する」(第２集70図より)

化という観点からは，セのような形が注目点になる(「出せば」：セバ・「出せ」：セ，のように)。

図3「すれば」ではセ(ー)バの地域は，図1の「しない」サネーより，さらに広いことがわかる。

また，**図4**「しろ」では，セ(ー)の地域は，仮定形セ(ー)バの地域とおおむね重なる。同時にシレ・スレのような形が他に見られる。

以上のように1枚の地図の情報をもって体系に関する判断を下すことは危険をともなう。ひとことにサ行五段化と言ってもさまざまであることがわかる。従来のようにサ行五段化と言うだけでは，全体の流れがとらえきれない。東北地方の「する」の変化をとらえるためには，各地点の情報を重ね合わせて見ることができる総合図を作成することが必要となる。

3．地図の重ね合わせと解釈(1)－サ行五段化－

図5は，図1～4を総合図にしたものである。

この図をもとにサ変動詞のサ行五段化の変化過程を考えてみよう。

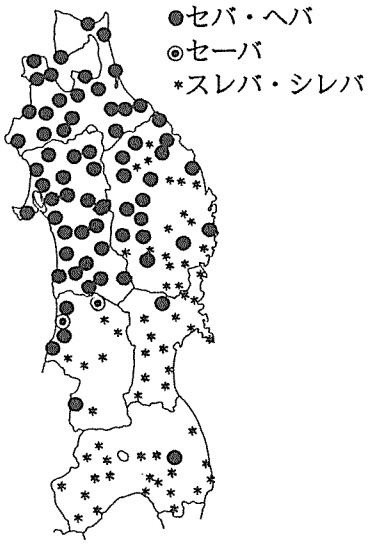
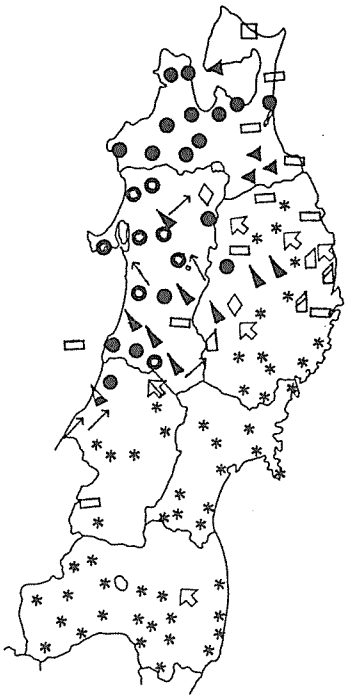


図3「すれば」(第3集131図より)

図4「しろ」(第2集91図より)



	しない	する	すれば	しろ
① ●	サネー	ス	セバ・ヘバ	セ(ー)・ヘ(ー)
② ○	サネー	スー	セバ・ヘバ	セ(ー)・ヘ(ー)
③ ◀	シネー・スネー	ス	セバ・ヘバ	セ(ー)・ヘ(ー)
④ ◥	サネー	スル・シル	セバ・ヘバ	セ(ー)・ヘ(ー)
⑤ ◥	サネー	スル・シル	セーバ	セ(ー)・ヘ(ー)
⑥ ▭	シネー・スネー	スル・シル	セバ・ヘバ	セ(ー)・ヘ(ー)
⑦ ◇	サネー	スル・シル	セバ・ヘバ	シロ・スロ
⑧ □	シネー・スネー	ス	セバ・ヘバ	シロ・スロ
⑨ ⇖	シネー・スネー	スル・シル	セバ・ヘバ	シロ・スロ
⑩ ⇖	シネー・スネー	スル・シル	セーバ	シロ・スロ
⑪ ↖	サネー	スル・シル	セバ・ヘバ	シレ・スレ
⑫ ↗	シネー・スネー	スル・シル	セバ・ヘバ	シレ・スレ
⑬ ◿	サネー	スル・シル	スレバ・シレバ	セ(ー)・ヘ(ー)
⑭ ◿	シネー・スネー	スル・シル	スレバ・シレバ	セ(ー)・ヘ(ー)
⑮ *	シネー・スネー	スル・シル	スレバ・シレバ	シロ・スロ

図5　東北地方「する」の活用の総合

変化の原形としては，「しない・する・すれば・しろ」に相当する形を立てる。そして，東北地方では，ほぼ全面的にシ／スの区別はないので，これらをスにまとめて話を進める。よって，スネー・スル・スレバ・スロを原形として考える。この形(見出し⑮)は，東北地方の南に分布する。

活用の型が，特定の型に類似する方向で変化する場合，変化を受ける側(この場合は，サ変)と似せられる側(この場合，サ行五段)に共通する要素があるのが通常である。共通部分を仲介した類推による変化である。例えば，一段活用のラ行五段化は，一般に次のような比例式で説明される。

取ル：見ル＝取レ：ｘ，ｘ＝見レ

ところが，スネー：出サネー・スル：出ス・スレバ：出セバ・スロ：出セの間には共通点がない(スをシにしても同じ)。つまり，スネー・スル・スレバ・スロの形を出発点とするだけでは，変化の起点が見つからないことになる。

ところで，地図を見ると，もっとも広くサ行五段型に類似した語形が認められるのは，仮定形セバである。このことから，活用形の中でも早く変化し，サ行五段に近付いていることが考えられる。

ここでは，ス(シ)の無声化母音との関連でｒが無声化し，脱落することを考えてみよう。次の環境のｒは，直前の無声母音の影響を受け，脱落しやすいと見られる(上野(1989)参照，なお，山形県荘内地方については井上(1981ab)参照)。

［ｓ＋狭母音＋ｒ＋広母音］(sura，suroなど)

例：宮城県 シャガ(白髪)，ナワッショ(苗代)

ここから，スレバ(sureba)＞スエバ(sueba)＞セバ(seba)という過程をベースに据える(これは，suruではｒは脱落しにくいということでもある)。

ところで，シ／スを区別なくスにまとめるとしたが，このスをシに置き換えると原形は，一段活用と同等であることがわかる。

シネー・シル・シレバ・シロ

見ネー・見ル・見レバ・見ロ

一段活用と同じ場合，先にも触れたラ行五段化を考慮する必要がある(小林(1997)p.85もこの点を示唆する)。**図6**には一段活用がラ行五段化し，命令形が見レ・起キレ・開ケレのような形で現れる地域を示した。なお，東北地方では否定形のラ行五段化(見ラナイ・起キラナイ・開ケラナイのような形)は見られない(この形は鶴岡市大山方言(大西(1994))など同様に，広く共通して，活用体系上受け入れられなかったものと考えられる)。

図6　一段活用命令形のラ行五段化
(第２集85・86・87図より)

以上をふまえた上で，まず，ラ行五段化を受けない流れを変化過程Ａとする。これにｒの脱落が仮定形に及んだものが⑨⑩と見られる。そして，仮定形セバをベースとして出セバなどとの類推から，⑥では命令形，⑦では未然形，⑧では終止形にそれぞれさらにサ行五段化を進行させた形が現れる。この場合，仮定形と同形になる命令形に変化が起りやすかった。よって⑥の分布領域は広い。⑥からさらにサ行五段化を進めたものが③(仮定・命令＋終止形)，④⑤(仮定・命令＋未然形)と見られる。そして，最終的に①②のような形でサ行五段化を完成させた。

一方，原形に対して，ラ行五段化を受けた流れを変化過程Ｂとする。完全なラ行五段型にあたる地域は，見当たらないが，ここから仮定形のｒが脱落して⑫が発生し，変化過程Ａ同様に仮定形を介して，サ行五段化を進めたものが⑪と見られる。なお，⑥の一部(日本海側に分布するもの)には，変化過程Ｂの中から発生したものもあるかもしれない。⑥からの③ならびに④⑤の発生は変化過程Ａと同様であるが，ラ行五段化の地域との関連性を考慮するなら④⑤の一部に止まるだろう。

⑭は，変化過程Ｂの中で扱うことは難しい。単に形の上からは説明できそうであるが，ラ行五段化の地域に重ならないからである。この場合は，周辺方言から命令形にセのような形が伝播したと

考えるのがよさそうだ。そこから未然形もサ行五段化し，⑬のような形に変化したと考えられる。

以上の流れを整理したのが**表1**である。まとめるならば，変化過程Aにせよ Bにせよ，大きな流れとしては，仮定形のｒ脱落形を起点としてサ行五段との近似化が起り，形態上類似した命令形から未然形，そして終止形へという順でサ行五段化は進行した，ととらえられる。そして，この経緯は地理的な分布の上にも反映していて，北方に行くほど順次に変化の進んだ形が見られる。言い換えるならば，周辺部ほど新しい形が現れるということであり，この分布は，いわゆる逆周圏論的な性質を持つことになる。

4．地図の重ね合わせと解釈(2)
－サ行五段型を源流と見る－

以上の考察は，従来言われてきたサ変動詞のサ行五段化という考え方を基本に据えたものである。活用においては周辺部でしばしば新しい形が見られるという一般的な傾向にかなった結論である。しかし，よく見ると行き当たりばったりな説明や事実に合わない規則など問題点が散見される。どうも，従来から言われるサ行五段化という方向に合わせるために無理が生じているようだ。

問題点の第１は，出発点のラ行子音の無声化による脱落である。これは確かに宮城県方言に強く見られる現象だが，東北地方の北部ではあまり見られないようである。現在印刷中の第４集186図「おもしろかった」を参照すると，オモシロにおけるｒに無声化がおよび脱落するのは岩手県中北部から秋田県南部にかけてのラインから南に限られている。当該のサ行五段化にあたる形は北方を中心に分布しているが，この形を先に考察した流れの中で考えようとすると，第１段階として考えたｒの脱落に無理があることになる。

問題点の第２もｒの脱落に関わることである。表を見ればわかるように，ある場合はｒを脱落させたり，ある場合にはｒを保存させたりと方向をサ行五段化に合わせるために，適宜，便宜的に規則をかけている傾向がある。変化過程Aで，なぜ命令形にｒの脱落が起らないのか説明されない。変化過程Bにおいても，ｒ脱落による⑫の発生に

表1　東北方言におけるサ変動詞「する」のサ行五段化過程

変化過程A（○の中は凡例の見出し番号）

原形	ｒ脱落	サ行五段化		
⑮ sunee suru sureba suro	⑨⑩ sunee suru se(e)ba suro	⑥ sunee suru seba se	③ sunee su seba se	①② sanee su(u) seba se
			④⑤ sanee suru se(e)ba se	
		⑦ sanee suru seba suro		
		⑧ sunee su seba suro		

変化過程B

原形	ラ行五段化	ｒ脱落	サ行五段化
⑮ sunee suru sureba suro	sunee suru sureba sure	⑫ sunee suru seba sure	⑪ sanee suru seba sure
			③ sunee su seba se
		⑥ sunee suru seba se	
			④⑤ sanee suru se(e)ba se
	???	⑭ sunee suru sureba se	⑬ sanee suru sureba se

おいて，なぜ同じ形なのに仮定形と命令形に同様な変化が起らないのかが説明されない。

第３の問題点は，仮定形を変化の起点と考えたわけであるが，この形がはたして，全体の変化を引っ張ることができるか，という点である。陳述の機能を持たないこのような形の牽引力に疑問を感じる。また，「力」という点ではサ行五段型という形式自体が「する」に及ぼす引力・重力もどの程度のものか，疑わしい。

第４の問題点は，秋田に見られる終止形スーをどう説明するかである。ｒ脱落の規則も適用しにくい形で，適当にあしらわれてしまっている。

以上のようにサ変のサ行五段化とされる現象は，サ行五段化という流れの中で見ようとすると，一応の説明ができるようでありながら，必ずしも十分に納得いくものでないことが理解されよう。

それでは，どのようにこの現象をとらえればよいものであろうか。

ここで検討してみたいのは，サ行五段の形を古いとするとらえ方である。この方向は，ここまで述べてきたのとは全く逆になる。周辺部にあるサ行五段型を古いと見るわけで，言語地理学的な見方に合致したものとなる。

この場合，問題になるのは，サ行五段型からどうしてサ変のような形に変化して行くかということになるだろう。変化のための起爆材，きっかけが求められる。

そこで考えられるのは，スという終止形の持つ問題である。繰り返し触れたように多くの東北方言のスは，シとの区別を持たない音である。特に東北北部ではシに近い音であることが知られている。この場合，一般に動詞の終止形はウ段音であることから，シという終止形は，特殊な性格を帯びる。また南東北であってもスの持つ母音ｕは不安定で，他のウ段音とは性格を異にする。さらに，終止形が１音節の形であること，すなわち，子音語幹動詞として見た場合，語幹が子音ｓのみで形成されることも特殊である。

この特殊性を解消するために，そして，動詞としての形の安定をはかるために，一段動詞に多く用いられるルを付加したと考える。いわば「靡(なび)き」の発生である。このことにより形の上での動詞らしさを持つことができる。ここから変格型が生まれ，より一般的な一段型へと変化への旅が続く。

この見方をもとにして変化過程を示すと表２のようになる。

一段化の流れは，未然・仮定・命令のいずれからも始まるが，分布領域から判断して，⑥の未然

表２　サ行五段型をもとにする東北方言における「する」の変化過程

原形	なびきの発生	一段化の進行			
①②	④⑤	命令形			
sanee	sanee	⑦	⑪	未然形	
su(u) →	suru	sanee	sanee	命令形	
seba	se(e)ba	suru	suru	⑨⑩	⑫
se	se	seba	seba	sunee	sunee
		suro	sure	suru	suru
		未然形		se(e)ba	seba
		⑥		suro	sure
		sunee			
		suru			
		seba		未然形	
		se		仮定形	
		仮定形		⑭	
		⑬		sunee	
		sanee		suru	
		suru		sureba	
		sureba		se	
		se			

未然形
仮定形
命令形
⑮
sunee
suru
sureba
suro

形から始まる方向が有力だったと見られる。そして順次，命令形・仮定形に広がっていった。

⑦と⑪，ならびに⑨⑩と⑫は，一段活用命令形の体系上の異なりであり，ここで扱っている観点の中では実質同等のものと見てよいだろう。

ここまでの大きな流れは，**表3**のように示せるだろう。福島県では受身形・使役形にまで一段化が進む(**図7・8**)。

問題は，表の中に盛り込んでいない③と⑧である。これらは終止形の「なびき」ルを持たない。これらについては，周辺方言から特定の活用形にだけ影響が及んだと見る。すなわち，③については，周辺方言から影響されて未然形に一段型が発生した。「しない」の地図を再度参照すればわかるようにスネーの分布領域のただ中にある。⑧についても，未然形は③同様に周辺方言の影響から一段型になり，命令形にも波及した。

先にサ行五段化で問題とした秋田の終止形スーは，「食う」の活用との関連が考えられる。「食う」も東北で広く五段活用的な活用を持つ単音節終止形の語であることが知られる。

例　鶴岡市大山

カネ(食わない)　ク(食う)

ケバ(食えば)　ケ(食え)

種市町平内(大西(1995)より)

カナー(食わない)　クー(食う)

ケーバ(食えば)　ケー(食え)

地域的な分布の詳細は不明であるが，種市町平内のようにクーのような長音形を残している地域では，スがスーとなり，いわば「群化」することにより体系を強化するような変化を起こしたことが考えられる。

5．「なびき」の発生をめぐって

「靡(なび)き」という語は，国学の用語から流用したものであるが，厳密な定義はここに用いたものとは異なる。ここでは，終止形・連体形に現れるル

表3　五段型から変格型，そして一段型へ

東北祖形→なびき付加形→未然形一段化→一段化進行→一段化完成

	[五段型]	[変格型]			
未然形	サネ	サネ	スネ	スネ	スネ
終止形	ス	スル	スル	スル	スル
仮定形	セバ	セバ	セバ	スレバ	スレバ
命令形	セ	セ	セ	スロ	スロ
受身形	サレル	サレル	サレル	サレル	スラレル

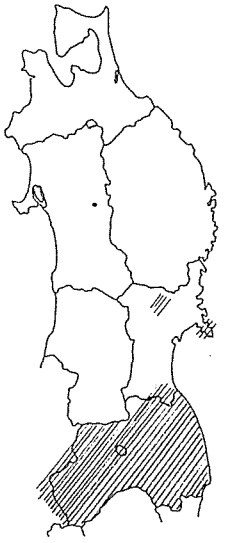


図7「される」の一段型
[斜線部：シラレル・スラレル](第3集117図より)

図8「させる」の一段型
[横線部：シラセル・スラセル](第3集121図より。なお，この地域の一段動詞使役形は開ケラセルが見られる；第3集118図参照。)

相当の末尾の形を「なびき」と呼んでいる。

さて，東北方言におけるサ行五段型「する」の変化のきっかけは，不安定な(活用体系上，有標な)終止形ス(またはシ)を安定させるための，なびきルの発生にあると考えたわけであるが，このようなことが本当にありえるだろうか。これについては，必ずしも生産的な規則ではないが，関連しそうな事例はある。この場合，シ・スだけでなく，やはり東北で広く知られるツと区別のないチでも同様な条件と考えると「待つ」を意味する「待チル・待ジル」のような語形が知られる。

『日本方言大辞典』によれば，東北地方では，青森県，岩手県九戸郡，秋田県鹿角郡，山形県東田川郡・鶴岡に見られ，古文献まで入れると，下北，庄内にも見られる。また，『現代日本語方言大辞典』では，青森，岩手(安代)，秋田に見られ，用例から判断して，一段活用型を持つようである。

その他，なびきの発生に関しては，やはり終止形の特殊性に起因するという点で，ワ行五段活用に相当する動詞に見られる変化も関連する現象である(岩手県種市町平内方言：「買う」カール，「追う」ボール，など)。この現象は，**図8**の地域に認められる。活用は，ラ行五段的な形を見せる(平内方言の命令形：買ーレ，ボーレ)。

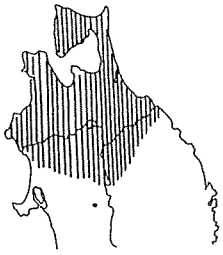


図8　ワ行五段活用のなびき付加形
(『日本言語地図』第2集64・65・76図より。縦線部「背負う」ショル，「貰う」モラルなど)

類似の現象は，本土方言の中では八丈(中之郷)方言にも知られる(平山(1965)pp.190-195，例:「拾う」(連体形)ヒローロ)。こちらもラ行五段的な活用を見せる(命令形：拾ローレ)。

また，鹿児島市に知られるサ行五段動詞の下二段化も関連する現象であろう。音韻的に語末のスは促音化しないことから，この方言の動詞終止形にとって一般的な促音形末尾をサ行五段動詞にも付加した結果，生じたものと考えられる。これも一種のなびきの発生である。後藤(1994)pp.30-33，佐土原(1957)をもとに例示すると次のようである。

出セン(否定)　出セタ(過去) 出スッ(終止)
出スレバ(仮定) 出セ(命令)

これは次の下二段と並行する。

混ゼン(否定)　混ゼタ(過去) 混ズッ(終止)
混ズレバ(仮定) 混ゼ(命令)

以上のように，条件さえそろえば，「なびき」を発生させることは特殊な現象ではないことがわかる。その上で，発生した「なびき」がどのような振る舞いをみせるか，すなわち，ラ行五段化するのか(語幹化)，一・二段化(語尾化)するのかは，その先の問題である。なびきの発生以前の活用やなびきの発生によって作られた形が活用体系の中でどのように位置付けられるかが，その方向を決定付けていくものと考えられる。

6．東北の「する」の位置付け

以上のように東北方言の「する」の原形(祖形)としては，サ行五段型をたてることが，妥当であると考えられた。変化のきっかけと考えたなびきの発生もとっぴな現象ではないことを述べた。

ところで，この原形は，中央語史の「する」の変化の流れの中で知られる形とは異なるものである。これは何を意味するものであろうか。

ひとつ考えられるのは，文献国語史以前の形を残すのではないかということである。この場合，文献国語史のみではなく，全国的な状況とどのように関連付けて解釈するかが求められる。当然のことながら，変格活用の成立にも関わる。

この方向は，日本語としての流れの中での位置付けである。しかし，あるいは，この方向ではどうしても解決がつかないこともあるかもしれない。

その際，浮上してくるのは，中央語の流れとは異なる「もうひとつの歴史」の存在である。つまり，「日本語」以前，そして「日本語」とは異なる歴史の残影という見方である。東北の「する」はそのような視点の要求を示唆するものかもしれない。

いずれにせよ，今は答えはない。さらなる分析が求められる。

7．不十分なデータと将来の展望

ここまでサ行五段型との対比をもとに考察してきたが，サ行五段動詞が，各地で五段型の活用を持つことは，確かめられているわけではない(サ

行五段動詞は，ＧＡＪの中では(イ音便形がねらいとなる)過去形「出した」しか扱われていない)。従来の研究の中で，東北方言のサ行五段動詞が特に問題とされなかったことから，中央語に知られる形とそれほど変わらないであろうという推測のもと，話を進めた。厳しく見れば，検証をともなわない一定レベルの「常識」によってたつ，ともいえる。しかし，全国的に見るなら，サ行五段動詞がイ音便形以外でも問題を有していることは，先の鹿児島市の例からもわかる。

一方，サ変「する」のデータも不十分なものである。「する」の古典語の活用は，次のように連用形を除けば，下二段に類似する。

未然	連用	連体	已然	命令
せぬ	したり	する	すれば	せよ
開けぬ	開けたり	開くる	開くれば	開けよ

九州の二段型残存の地域でこれらがどのような関係になっているのかをみようとしても，「する」の連用形はＧＡＪに含まれていない。

このように各地の詳しい状況がわからないということは，先に触れた「食う」についても同様なことで，東北の「する」の終止形に見られたスーの解釈は，推測のレベルにとどまる。

これは，活用だけの話ではない。特定のことがらについて考察しようとすると，関連する項目の欠如により，一定のレベルでとどまらざるをえず，その先は，先行研究に記載された内容をさがしだして，推測するしかないことはしばしばある。将来の全国規模の調査に期待されるところである。

そして，その実行にあたっては，これまでのように目立った分布を見せるかどうかへのこだわりは，そろそろ捨ててもいい頃ではないだろうか。目立った分布は人目を引くが，それだけが独立して持つ意味は希薄である。このことは，東北の「する」に関わる１枚ずつの地図だけでは何も言えないことから理解されるであろう。

同時に，地図はあくまでもデータベースの表現方法のひとつに過ぎないことを理解しておく必要がある。一番求められるのは，データベースの中身の充実である。そして，そのためには，分析に耐えるような形式と意味の基本的な枠組みを用意することが必要である。

方言の衰退が言われて久しい。しかし，新たなデータベースの作成はまだ間に合うはずだ。実は，「しない」にあたる分布は『口語法分布図』でも扱われている(第７図)。図が示す分布は，ＧＡＪと若干異なるが，『口語法調査報告書』(第33条)を合わせ見ると，ＧＡＪの状況とかなり重なるらしいことがわかる。つまり，明治から大きな変動を起こしていないわけである。

『口語法分布図』と較べれば，ＧＡＪは地図自体のみならず，手続きの透明性も含めて，格段に解像度を上げた。これから先は，急がず，慌てずにきちんとしたデータベースを残すことが，将来に向けてわれわれに課せられた義務なのである。

８．むすび

東北方言の「する」の活用の解釈を通して，総合図の必要性と将来の全国調査に向けての課題を述べた。

方言の中にはいまだ解明されない「歴史」が存在する。これは「する」ひとつの話ではない。大きくは「ひとつの日本」，そして日本人を問い直す問題にも結び付く可能性を秘めている。

【文献】

井上史雄(1979)「荘内地方におけるサ変動詞の五段化と下一段化」『山形方言』15

井上史雄(1981a)「荘内方言のｒ脱落にみる形態変化の近代史」『東京外国語大学論集』31

井上史雄(1981b)「音韻変化の伝播過程－荘内方言におけるｒ脱落－」『方言学論叢Ｉ』(三省堂)

上野善道編(1989)「音韻総覧」『日本方言大辞典』(小学館，所収)

大西拓一郎(1994)「鶴岡市大山方言の用言の活用」『鶴岡方言の記述的研究』(秀英出版)

大西拓一郎(1995)「岩手県種市町平内方言の用言の活用」『国立国語研究所研究報告集』16

金田一春彦(1977)『日本語方言の研究』(東京堂出版)

後藤和彦(1994)『鹿児島方言の語法研究』

此島正年(1961)「青森」『方言学講座』２(東京堂出版)

小林隆(1997)「動詞活用における一段化傾向の地理的分布」『日本語の歴史地理構造』(明治書院)

佐土原果(1957)「鹿児島(市)方言動詞の粗描」『国語学』31